

## ネットワークの生成と対話ミーティング

—未来語りのダイアログ実践を通じて—

高木 俊介\*

抄録：未来語りのダイアログ (Anticipation Dialogue : AD) は、オープンダイアログ (Open Dialogue : OD) と並んでフィンランドに生まれたダイアログの方法である。OD が精神医療の場で生まれたのに対して、AD は様々な対人支援において、支援ネットワークが協働作業で困難な状況に陥ったのを打開するために用いられる。AD の方法を簡単に紹介するとともに、AD の実際を紹介し、それによって支援者のネットワークがごく自然に出来上がる様子を示し、その機制を「場の理論」と「中動態」がもたらす世界観を手がかりにして分析した。

精神科治療学 33(3) : 283-289, 2018

Key words : *Anticipation Dialogue, theory of fields, middle voice, network*

## はじめに

Jaakko Seikkula と Tom Erik Arnkil の著書「Dialogical Meetings in Social Networks」<sup>1)</sup>には「オープンダイアログ (Open Dialogue)」(以下, OD) と「未来語りのダイアログ (Anticipation Dialogue)」(以下, AD) という2つのダイアログが紹介されている。このタイトルからわかるように、この2つはソーシャル・ネットワークの中で行われることが重要である。

筆者は、2017年の春にADの創始者である Tom Arnkil とその実兄で広く実践を行ってきた Robert Arnkil を京都に迎え、1ヵ月をかけた私的な研修の集まりをもった。その継続として同年の秋にも

Tom Arnkil による実践スーパービジョンを開催している。それ以来、日本におけるADへの注目も高まり、白木の紹介<sup>6)</sup>やAD実践を広めるための「ダイアログ実践研究所」<sup>1)</sup>が創設されている。

## I. 未来語りのダイアログ (AD) とは何か

OD が精神医療から始まったのとは違って、AD は、特に子どもや青少年とその家族に対して多機関、多職種が関わる困難の中から発展してきた。現代社会では、多くの人がその人生途上の様々な時点で、心理社会的な仕事を行う複数の専門家の支援を得ることが不可避となっている。そのようなネットワークには様々な葛藤が生じる。例えば往々にして、支援者同士がお互いに相手が何をしているのか、どのような支援者、関係者がいるのか知らないままである。支援者や関係者は互いに不信感を持ったり、互いの言動に不満を抱えていることが多い。

AD は、このような援助が行き詰まった状況を

Dialogical meetings in social networks.

\*たかぎクリニック

〒604-0981 京都府京都市中京区御幸町通竹屋町上る  
毘沙門町557-2 ACT-K ビル3階

Shunsuke Takagi, M.D.: Takagi Clinic, 557-2, Bishamon-cho, Sasaya-cho-agaru, Gokomachi-dori, Nakagyo-ku, Kyoto-shi, Kyoto, 604-0981 Japan.

打開するために考案された。AD ミーティングには、そのケースに関わっていない部外者である対話のファシリテーター2人が参加する。2人のファシリテーターは協力して、多様な関係者が関わって生じている「袋小路」において、「参加者が交互に話し聴くようにミーティングの場を構造化」することによってダイアログを促進する役割を果たす。

ファシリテーターは、ミーティングの始まりにおいてこのミーティングを招集した援助者に対して、援助者自身の心配事について聞く。そしてそれを解決するために、今回はADという方法を使うことを説明し、参加メンバーに任意の未来（例えば1年後）に「飛んで」もらう（このテクニックについては細部にわたり様々なものがある）。そして、1年後の未来に参加者がすでに居るものとして、第一段階として当事者とそのプライベート・ネットワークメンバー（家族や友人など）のそれぞれに次のような質問を行う。

質問 A-①：1年が過ぎました。そして皆さんはとてもいい状況にいます。それはどんな状況ですか？中でも特にいいなと感じるのはどんなことですか？

質問 A-②：何が良かったのでしょうか、あなたはどんなことをしたのですか？誰が何をしてあなたを助けてくれましたか？

質問 A-③：1年前にはあなたは何を心配していましたか？何があなたの心配を和らげてくれましたか？あなたはその心配を和らげるために何をしましたか？

上記の3つの質問を当事者ネットワークのそれぞれに行った次の段階では、ファシリテーターは援助者のネットワークに対して次の質問をする。

質問 B-①：1年が過ぎて、当事者のみなさんはお聞きのようないい状態です。それに対してあなたはどんな支援やサポートをしたのでしょうか？誰がどのように、あなたの支援を助けてくれましたか？

質問 B-②：1年前にはあなたはどのようなことを心配していましたか？何があなたの心配を和らげてくれましたか？

これらの質問を通して、ミーティング参加者そ

れぞれの行動や工夫、支援やサポート、不安や心配事を軽減させたものが語られ記録される。最後に、皆で現在の時点に戻って、全員で協働作業の計画を具体的に立てる。こうしてミーティングが終了する時点では、参加者のそれぞれがこれから行っていく現実の作業が明確になっている。

筆者らはADによるミーティングの研修を行い、実際の当事者と支援者によるミーティングを経験した。その様子を参加者のプライバシーに触れないよう改変して簡単に紹介し、ADの持つ可能性について考察する（名前は仮名）。

## II. AD ミーティングの実例

正子は発達障害を持つ30代の女性。大学卒業後、職場の人間関係と仕事量の多さに挫折し、自宅にひきこもるようになった。しばらくして家族関係の葛藤から急性精神病状態となり統合失調症との診断で筆者らのACTによる支援（多職種チームによる包括的支援）を受けるようになった。その後はうつ状態、パニック発作など多彩な症状が出現し、自殺企図による重度の骨折をきたして半年間精神科病院に入院している。現在は葛藤のある家族との距離をとるために一人暮らしをしている。地域の作業所に通所し、得意のイラストをつけた小説を評価されていたが、人間関係のトラブルから通所を断られた。その経緯などから発達障害と診断され、その障害に合わせた支援のためについ数ヶ月前からACT以外の支援機関に関わるようになった。ミーティングの直前、不整脈が見つかった正子は、パニック発作が頻回となり自分が心臓病のために突然死んでしまうのではないかと不安が高まっていた。

正子を担当するACTチームは、主治医の筆者と訪問看護ステーションの妙子と雄二であり、ホームヘルパーの幸子、地域の発達障害支援機関のケースワーカーのさとみである。居場所を失った本人の不安定さと、新しい支援者の間の役割分担の不明確さや互いに未知なチームであることから、支援に混乱が生じていた。ミーティングを招集した妙子の不安は、こうした状況で自分がど

う振る舞って何をしたらよいかかわからないということであった。

ミーティングはTom ArnkilとRobert Arnkilの2人をファシリテーターとして行われた。Tomがインタビューを行い、Robertが記録を参加者全員に見えるように板書した。ミーティングは同時通訳で行われ、板書も同時に日本語訳された。

上に簡単に述べた手順に従ってミーティングを開始した。Tomは世間話を巧みに織り交ぜながら皆の緊張を解き、正子はある程度英語を解するため2人のファシリテーターとすぐに打ち解けた。どのくらい先の未来を想定するのが良いかについて、主に正子の考えが聞かれ、正子は熟慮して、自分は夏が苦手なうつ状態になり、身の回りのこともあまりできなくなってひきこもってしまうので、その夏が過ぎた今から半年後の秋であれば良い状態を想像しやすいと述べた。ファシリテーターはその場に適した「ちょっとした」技法を使って我々をその半年後の未来に導いた。そして、その未来の時点において、まず当事者である正子に対して前述の3つの質問を行った。

Tom：半年が経って正子さんにとって物事はとてもうまくいっています。それはどんな状況ですか？

正子：夏が過ぎて体の調子がいいです。身の回りのことがちゃんと自分でできています。それに小説がいろんな人に認められて出版の話も進んでいるんです。それでいろんな人間関係ができました。

Tom：何が良かったのでしょうか？あなたは何をしましたか？

正子：働いていてうつになった時の自分の経験を出版社の人と話しました。そうしたら、それを書いてみませんかと言われました。

Tom：誰があなたを助けてくれましたか？

正子：小説の指導をしていただいている教室の先生に認められました。夏が過ぎた頃に教室に行くことができて、その時です。夏の間にも少しずつ書いていました。幸子さん（ヘルパー）が私の執筆の邪魔にならない程度に気晴らしの相手もしてく

れたので。主治医の先生が私が暴走しないようにやり過ぎをうまく止めてくれているので続いています。アドバイスもくれるんです、ファン目線で。他にもいろんな人に小説を読んでもらっています。アパートの部屋ではなかなか書けないので、たまり場に行って書いています。

（このような答えが出るに際して、Tomはどこでどんな小説を書いているのか、いつ頃から小説が書けるようになったのか等、物事をより具体的に質問をいくつかした）

Tom：半年前は正子さんは何を心配していましたか？

正子：今年の夏は超えられるかな、って。私、すぐ死にたくなるし。心臓も悪くて不整脈がひどかった。人と話すこともなくて、趣味の小説もイラストも書けなくて、ずっと泣いてばかりいて、しょっちゅうACTさんに緊急電話をしていました。

Tom：何がその心配をなくしてくれるのに役立ったの？誰が助けてくれましたか？

正子：幸子さんがずっと食べられそうな食事をつくってくれたし、話し相手になってくれた。さとみさんが外出に誘ってくれて、居場所になりそうなところを探してくれた。

以上のようなやりとりがあった後、前述のBの2つの質問が順次支援者になされた。心配事の提出者である妙子は最後に質問された。Tomは正子の最初の心配が体調のことだったことをとらえ、まずは訪問看護師の雄二から質問を始めた。

Tom：正子さんが言っているように今の彼女はとてもうまくいっているようです。この状況に対してあなたは何をしましたか？

雄二：正子さんは体調のことを心配していたし、内科の医者にうまく症状を伝えられなかったり、医師の説明や指示をうまく理解できないみたいなので、一緒に内科の受診に行きました。そこで彼女の特性や心配を医師に伝える手伝いをしました。

Tom：それはいつでしたか？

雄二：前回の春のミーティング（今回のADミーティングのこと）が終わってすぐでした。

Tom：あなたがそれをするのに誰かが助けてく

れましたか？

雄二：時間が足りずにずっとついていられなかったの、さとみさんが途中で交代してくれました。

Tom：他にも何かしたことがありますか？

雄二：彼女の小説をACT-Kの他のメンバーにも読んでもらって感想をきいて、それを彼女に伝えました。そういえば、夏の間西日がきついで、ヘルパーさん（幸子）と一緒にカーテンを替えたりガラスにフィルムを貼るのを手伝いましたね。

Tom：それはいつ頃ですか？

雄二：6月の終わり頃でした。これから暑くなるので。

Tom：（幸子のほうをみて）幸子さんはそのことを覚えていますか？

幸子：あ、はい、彼女の部屋、カーテンが薄いのしかなかったの、これじゃ夏は部屋の中が暑くて大変だろうなと思ったんです。

以上のような質問の後、上記B-2の質問が行われた。同様なことが、筆者、幸子、さとみ、妙子に行われた。その中で、筆者は正子がそれまで書きためていた小説とイラストを夏前に知り合いの編集者に送って当事者を中心とした雑誌への掲載ができないか相談したことを「思い出し」た。また、それまで正子の心氣的訴えに振り回されているのだらうと思っていた内科医と連絡がとれ、内科医から正子の不整脈は心配のないものであることをきちんと伝えてもらい、それ以後不整脈に対する正子の訴えがなくなっていることに「気づいた」。

幸子は、ヘルパーとして正子にどのような対応をしているのかわからず戸惑っていたが、「半年前」にスタッフと集まってミーティングをしたことで、自分のやっていることに自信が持てた、そのために夏に正子がしんどそうにしている時にもうまく話し相手になれたと語った。

さとみは、秋までに妙子と協力して、正子が自由に出入りできて執筆に没頭できる居場所を探した。この過程で、新しくチームに入って正子に対してどのような役割で接して良いかわからず戸惑っていたさとみは、妙子と協力して動くうちに正

子とのつきあい方が自然とわかって関係が良好になったという。妙子は、こうして皆が協力して動くことで正子に外への興味がしっかり出てきたために、一番の懸念だった両親との不仲に対してもじっくりと取り組んでみようという見込みが持てたことが一番安心なのだと話した。

こうして質問がすべて終わったところで、メンバーは半年先の未来から半年前の現在に戻り、これから現実に行う協働作業を確認した。そこで、内科の受診に雄二とさとみが日程を調整すること、夏前に雄二と幸子が部屋のカーテンの購入に付き合うこと、さとみと妙子が居場所を探しに正子と同行すること、筆者が知り合いの編集者に小説を送ること、今回のミーティングについて妙子が家族に知らせることなどの支援のための行動が日程も含めて決まった。実際のミーティングは3時間近くを要したが、全員がしっかりと相手の話を聞き、自分の考えを思う存分話せた感覚もあった。ミーティング後の半年間、実際に各々のメンバーは自発的に活動し、メンバー全員の希望によってフォローアップ・ミーティングが開かれている。

今回のADでは、ある支援チームの組み方に変更があり、新旧の支援チームのメンバーの間に溝ができており、チームがうまく機能しないという状況で行われた。どのメンバーも十分に真摯に関わっていたものの、本人の意向や気持ちを聴けるのは旧来のメンバーであった。そのために、今後の生活範囲の拡大のために必要な新しいメンバーに対して、旧来のメンバーが間に入って指示を出すという形になり、支援に混乱が生じていた。

支援の専門家は、どのような職種であれ、自分たち専門職がすべきことに合わせて当事者を見る。そのために、支援者の見方や行為は当事者のニーズからすれば的外れであったり、支援者相互が自分たちが問題とされているところにばかり関わって、互いに矛盾する行為を行っている可能性がある。そのために支援がうまくいかないと、往々にして問題はすべて当事者の側にあるのだとされてしまう。ADが効果を発揮するのは、このような状況に陥っている支援チームに対してである。ADでは当事者自身のニーズに焦点を当て、それ

が未来において充足しているという状況を仮想し、その未来の時点から、当事者自身と支援者それぞれが当事者のニーズを充足するためにとった行動について「想起して」話す。ファシリテーターは、「問題の解決」ではなく、「ニーズの充足」に向けて行われた支援者たちの行動を、いつ、どのようにしたのかを明らかにするとともに、その行為を他の支援者と結びつけていくことでネットワークが自然に生じる。

実際にADミーティングを経験すると、このような自然さが明確に実感される。はじめはまるで狐につままれたような感じすらするのであるが、出来上がった現実の協働作業の目標は、純粋に当事者のニーズに沿ったものなので、支援者同士の思惑の入る隙がなく、実に円滑に協働作業へと踏み出すことができる。

### III. ADと「場」の概念

このような感覚は、一言で言えば我々が（専門家としての）意図をもって呻吟しながらつくりあげたのではなく、気がついたらできていた、そうになっていたというものである。Tomらは、これを「場」が「境界を乗り越え、その境界上に新たな領域をつくりだし、個々の行為者の限界を超え…＜対話＞を、異なる立場にいる人々のあいだに生み出す」と表現している。実際、経験した我々も実習の中でうまくいかないことがあると、「場の力を信じよう」と言い合った。Tomらは、この場は競技場（アリーナ）や古代ギリシアのアゴラのようなものであるとして、日本の西田哲学や組織論も引用しながら「場」の概念を説いている<sup>5)</sup>。この点を補完して本稿の簡単な考察とする。

Tomらの説く場の理論では、まず場という実態があって、その場に参入する個人が相互作用を起こすことで変化を生むと主張される。「場という実態」とは、例えば企業では会議という場所と時間の枠組である。しかし、このような理解では、場は最初にすでに組織されてあるものとなり、そうなるそれを組織するリーダー、つまりその場を掌握している者が必要となってしまう。そして、専門家は各々の専門的視点から見た当事者やその

状況の「問題点」をあらかじめ検討して、その解決のための「意図」をもって場に臨む。これは病院などで行われる従来のカンファレンスの形式と同じである。我々がADによって経験したような、従来のカンファレンスにはない自由さや自然に生じる協働性の感覚や実感を説明できない。

このような違いが生じる理由は、2つあると思われる。1つは、ADで行われる対話では、あくまでも当事者のニーズが中心であり、それ以外の様々な「意図」は脇に置かれることである。いったんADを始めると、自分たちがあらかじめ持っていた専門家としての視点から見た問題性やその解決法は、自然に放棄されることになる。専門家の視点からあらかじめ抱いていた解決策が我々自身を縛っていたのである。当事者のニーズに対して「それは実現困難だよ」と言ってしまうのがその良い例であり、このような言動によって実は我々自身の選択の幅を狭めているのである。

2つめは、すべての関係者が対話の場に直面することによって、我々の言動が自然と相手の言動に影響されながら対話が行われるということである。ケースでも描写したように、ファシリテーターも支援者同士の協働作業に焦点を当てて対話を促す。あなたはそれを誰に助けられてしまったか、というように。ADの場に参加した我々は、当事者のニーズに引き込まれ、他の支援者の言動に互いに添いつつ考えるのである。

このようにして「場」自体が、それぞれの個のものの見方を持った個人が集まってそこで問題を同定して解決しようとする「競技場」や「アゴラ」ではなく、「場」自体も新たな見晴らしを持つものに変化する。そして、その場の力がまた個人の言動を変化させる。各個人とその集まりである「場」は、ともに全く新たなものになる。このような場と個人のともに起こる変化については、理論社会学者・桜井洋の「社会場」の理論が明らかにしている<sup>6)</sup>。桜井によれば、社会ネットワークは「相互に志向し依存する人々の構造の結晶体」であり、同時に「個人は場の運動として結晶化する」のである。

行為者が行為を「する」ことによって対象の変化が生じるという、主体があって初めて世界が構

築されるという見方(存在する「我」をすべての自己原因とするコギト主義)は、西洋的な主体思想が骨がらみになった社会の見方である。桜井の場の理論では、全体を分節化せず「する」主体を析出することのない「なる」という自動詞が、個人と社会の関係性をうまく表しているという。そのような場では「不確実性(contingency)は縮減すべき対象ではなく、秩序の源泉とみられる」。ADの場に沿って言えば、はじめ当事者・専門家のそれぞれは、それぞれ別個の背景を担ったエージェントとして場に混乱をもたらしている。そこに、当事者のニーズと参加者の相互依存というADの構造を与えられることによって、参加者は当事者が思う未来に「あえて乗る」ことになる。すると、新たな「可能性のうず」が生じ、参加者はそれに「ひきこまれ」、協働するネットワークという新たな秩序が生まれるのである。

#### IV. ADと中動態の世界

では、おのが職務として「何かをする」ことを意図していた我々は、どのようにしていつのまにか自然にネットワークに「なる」という感覚を得るのであろうか。我々支援者は最初は現状にある「問題」に対してそれを専門的に解決するという意図をもって、あるいはそのような策が何も見つからないために困惑してミーティングに臨んだ。それぞれの意図や躊躇は錯綜しており、かえって支援を混乱させているように思われた。このような時、従来のカンファレンスでは、支援者の誰かがリーダーシップをとって意見をまとめていくが、多くの場合はその結果として生まれる一致は表面的なものである。なぜならリーダーにとっての問題は解決しても、他の支援者にとっての(あるいは当事者にとっての)問題は解決しないからである。そして、解決しない問題を抱えたまま、他の支援者が見る問題に関わるようになった支援者(当事者)は、「する」はずだった意図が挫かれて、「させられる」行動にとって代わる。

だが、ADではこのような「させられ」感が生じない。それどころか、ミーティングに参加した全員からフォローアップ・ミーティングが提案さ

れるまでにチームとしての一体感が生まれる。このように能動的に支援を「する」ことを強いられることから自由になり、誰もが受動的になることなく、参加者たちは支援チームに「なる」ということを理解するのに、「中動態」という考え方が参考になるだろう。

國分功一郎は様々な依存症がその始まりも治癒も本人の意図や意欲でもないところから発するように見えることに注目し、中動態という現代では失われた文法的態の存在からそれを理解しようと試みた<sup>3)</sup>。我々の行為には、能動態で表現されるものに収まりきれず、かといって受動態でもないものが多く、主要な言語にある能動と受動の区別では表現できない。しかし、古代印欧語でも日本語でも、実は能動態は「中動態」と呼ばれる態に對立していた。それが、近代以降特に顕著になったように、あらゆる行為を主体が対象に何かをなすことという主体を中心とした世界観の確立によって中動態が失われたことを國分は考証している。このような現代言語は能動と受動を区別せずにはやまず、常に行為の帰属先を求め能動か受動かを選ぶようになる。その言語を通じて形成される我々の世界観もそのようなものになっている。我々の関心に戻れば、このような世界観こそが、専門家が対象をコントロールすることを当然のこととして疑わないのである。

中動態の痕跡は現代の言語の様態の中にも残されている。國分の主張を補完しているのが言語学者の池上嘉彦が指摘する、物事が「自然の勢い」で生じることを表す日本語の「なる」という自動詞であり、池上はこれを「する」ことを中心にした英語とは対照的であるとしている<sup>3)</sup>。この「なる」という表現は全体を分節化せず全体の様相が変化することを表し、誰がそうしたのかという主体を析出しない。

ADのミーティングの場で生じることは、このような「なる」感覚であり、そこには問題を同定してそれを解決「する」という専門家がまもっている姿勢は脱ぎ捨てられている。当事者の側にも、専門家が往々にして「振り回される」という感覚を抱くような現状の打破を求める焦燥や不安が存在しない。ADにおける「未来に飛ぶ」という操

作は、このような世界、つまり中動態のパスベクティブによる世界を現出させるのである。

もちろん、ADの最後に我々は現実に戻って、それぞれがこれから行う自分自身の行為に責任を持つことになる。しかし、その行為はミーティング以前にあった専門家としてせねばならぬと定められている職務として遂行「する」行為ではなく、当事者のニーズに合わせて自らが選び取った行為と「なっている」のだ。

#### おわりに

フィンランドで生まれたADは、多職種が関わることで混乱を生んでいるケースについて行われるダイアログの方法である。ADミーティングでは我々の専門家としての先入見が払拭され、支援チームは当事者のニーズに沿った協働作業を行う新たなネットワークにごく自然の勢いで「なっている」。この創発過程は、「未来に飛ぶ」「未来を想起する」という特異な方法によって生まれるのであるが、それは専門家として問題を操作するこ

とを強いられている我々の専門性を脱ぎ捨て、ミーティングの場から自然に「なる」ものであった。ADの持つこのようなネットワーク形成の可能性は、我々が「場の力」を信じる時にさらに「なり」やすく、中動態的な世界観を体得することでより発展させることができるのではないだろうか。

#### 文献

- 1) ダイアログ実践研究所ホームページ (<http://www.dialogical.one/>)
- 2) 池上嘉彦:「する」と「なる」の言語学一言語と文化のタイポロジーへの試論一.大修館書店,東京,1981.
- 3) 國分功一郎:中動態の世界—意志と責任の考古学一.医学書院,東京,2017.
- 4) 桜井洋:社会秩序の起源—「なる」ことの論理一.新曜社,東京,2017.
- 5) Seikkula, J. and Arnkil, T.E.: Dialogical Meetings in Social Networks. Karnak Books, Ltd., London, 2006. (高木俊介,岡田愛訳:オープンダイアログ.日本評論社,東京,2016.)
- 6) 白木孝二:フィンランドからのもう一つの贈り物—未来語りのダイアログ—.精神療法,43:339-345,2017.